

平成 26 年度 塩津港遺跡の発掘調査における調査成果について 『古代塩津港の本格的な港の姿が明らかになる』

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、国土交通省近畿整備局滋賀国道事務所と滋賀県教育委員会からの依頼により、国道 8 号塩津バイパス工事に伴う塩津港遺跡の発掘調査を、平成 24 年度から実施しています。

これまでの調査で、古代末から中世にかけての塩津港の様子が明らかとなりつつあります。古代、中世では自然の地形を利用した港が多いのですが、塩津港は 12 世紀頃に琵琶湖を埋め立てて造った他に例を見ない本格的なものであることが判ってきました。

平成 26 年度の調査では、港の構造の一部が明らかとなり、また多種多様の遺物からは、古代末の塩津港が多くの人々が行き交い、日本を代表する港町として大いに繁栄していた様子が窺えます。海洋国日本の古代から中世にかけての港町の考える上で重要な資料となるといえます。

1. 塩津港の歴史

塩津港は琵琶湖最北端にある港です。かつて北陸の物資は日本海の敦賀に集められ、山越えて日本海に一番近い琵琶湖の港である塩津に運ばれ、ここから琵琶湖水運に乗せて京都に送られました。『万葉集』にも詠まれ『延喜式』にも記載されている塩津港はかつては日本の物流を支え、大いに栄えた港町でした。今も塩津浜の町並みに近世の港町の面影を残していますが、さらに古い塩津の港町がどこに、どんな様子で存在していたのか、これまではまったく不明な状態でした。しかし近年、発掘調査が立て続けに行われ、その姿が徐々に明らかになってきています。

2. これまでの発掘調査の状況

平成18年(2006年)から実施しました大川改修工事に係る調査では、堀で囲まれた平安時代の神社跡が見つかり、堀からは「起請文木札」や「神像」などが出土しています。さらに、平成24年(2012年)から開始しました一般国道8号塩津バイパス工事(塩津浜地区)に係る調査では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての港跡が見つかっています。

これまでの塩津港遺跡の調査成果は、「古代の宗教関連施設を検出(2006年)」「起請文木簡出土(2007年)」「神像5体が出土(2008年)」「港の護岸施設を検出(2012年)」「荷札木簡が出土(2012年)」と題し、記者発表し公開してきました。

今回、平成24・26年度の一般国道8号塩津バイパス工事に係る調査で、古代末から中世にかけての塩津港が他に例を見ない本格的な造成によって造られたものであることが明らかとなり、また多種多様な遺物からは、その繁栄ぶりを窺うことができましたので発表します。

3. 調査の成果

(1) 本格的な港、塩津港

古来、港は自然の地形を利用して造られるものが多く、入江・ラグーン(潟湖・内湖)・河川などに設けられています。これらの港に対して、古代塩津港は琵琶湖を埋め立てて造ったもので、本格的に構築されて造られた港といえます。

琵琶湖を埋め立てる工事は平安時代の終わり12世紀の前半に始まります。船が着岸するための施設として、高さ1mほどの垂直護岸、幅1.2mの棧橋(さんばし)、幅2mの水路、石を張り込んだ傾斜

護岸などが検出されました。これらの施設は琵琶湖を埋め立てて造られたため、元々湖だったところは1.5m 嵩上げされて陸地となり、琵琶湖に向かって湖岸は27m 以上前進しています。

港の造成工事は1回で行われたのではなく、工事は繰り返し何度も行なっています。工事が始められた12世紀の前半から、元暦二年（1185）に発生した大地震までの約60年の間を見ても7 回以上の拡張や嵩上げを行なっています。

造成には杭に小枝を絡ませた「シガラミ」、杭を隙間なく打った「高密度杭列」、薄板を斜行させて重ねた「菱垣（ひがき）」など様々な工法を用いて護岸し、内部に岩や土砂を充填しています。埋立地の上には関板（造成の縁取りに使う薄板）を用いて版築した方形基壇が築かれ、船が着岸した水際ギリギリにまで建物が密集して建てられていたことを想定できます。

（2）塩津港の繁栄

発掘調査では、多彩で多様な遺物が大量に出土しました。その量は当時の都（京都）を凌ぐほどの濃密さで、塩津の港がいかに繁栄していたか窺うことができます。

大量の遺物からは当時の塩津の街の様子が浮かんできます。

先の神社跡の調査や今回の港跡の調査から出土した船の模型から、塩津港に入ってきている船は板造りの構造船で、当時の最新鋭の船であることがわかりました。後の琵琶湖の代表的な船「丸子船」の先祖になります。米（炭化米）や豆類、それらを入れていたと考えられる俵などの出土は、船で運ばれた輸送品となります。先に出土し発表した荷札木簡には「米十石の代わりに黒毛母馬」（2012年）と書かれており、馬も運ばれていました。これら輸送品を管理するために欠かせない文具として、石製としては最古級の「硯」（12 世紀）や「物差し」が出土しています。

具体的な交易先「敦賀」と記された土師器皿も出土しました。

食器や箸などの生活用品も多量に出土しています。お皿（土師器皿）などは京都のもので、この港が京都と直結していたことを示しています。箸（スギ）は数千本出土しています。ハエの蛹（さなぎ）も多数見つかり、衛生状態があまり良くない状況が見られるのですが、港町ならではの労働人口の多さや、活況さを伝えています。

高級食器の一つ漆椀も多量に出土しています。同じく高級食器である輸入陶磁器も多いのですが、これらの多くには持ち主を表す墨書（名前）があり、輸送品ではなくここで使われていたものであることがわかります。さらに、嗜好性の高い白磁の壺や、白磁の犬、白磁の人形なども出土しています。余裕ある生活を行っていた人々も多かった様子を伝えています。

輸送に直接かかわった人々の様子を示すもの以外に、手工業からの廃棄物である加工木片や鍛冶屋のゴミである鉄滓が見られます。さらにヤットコやハサミ・紡錘車などの工具、朱漆が入った漆皿なども出土しています。材木屋、船大工、鍛冶屋、漆絵付け屋、機織り屋、細工師などあらゆる業種の人々がいたことを物語っています。

港で働く人々の姿を想像できる装身具も見つかっています。整髪用具である筭（こうがい）、女性の簪（かんざし）を飾ったであろう直径1.36cmのブルーのガラス玉も出土しました。男性が身に着け万能に使われた刃渡10～25cmほどの腰刀も50本程度出土しています。

当時の人の姿を描いたものとして、烏帽子（えぼし）を被った人の顔を線刻した土師器皿があります。他に、立体的な造形で足も付けられた鳥形代や、当時の代表的な楽器のひとつである銅拍子（どびょうし・チャップ）などが出土し、祭などが盛んにおこなわれていた様子も窺えます。

(3) 古銭

最下層からは皇朝十二銭が船の上から湖中に投げられたような状態で出土しました。「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」「隆平永宝」(西暦708~796年)の4種類で100数枚あり、出土時は赤銅色を呈していました。まだ埋め立て工事が始められる前から盛んに交易がおこなわれ、船が盛んに行き来していたことを示しています。

4. まとめ

古代末から中世にかけての本格的な港跡が見つかり、その様子が明らかとなるのは、塩津港遺跡が初めてです。

港の空間を広げる造成工事、またその工事が頻繁に行われたその様子は、塩津港の重要性と活況を伝えています。また、出土した遺物からは、塩津港が単なる積み替え港ではなく、物資が集中し、様々な人々が行きかう活気に満ちた港空間であったと想像できます。古代の塩津はまさしく小都市の様子を呈していたと考えられます。

その後、琵琶湖の水位は上昇し遺跡は水没しています。そのため、遺構は乱されることなく、また遺物類も土器類だけでなく木製品や骨角器、金属製品など、葉の一枚までが腐らずに残っています。今回の調査は塩津港遺跡の一部ではありますが、港湾構造物や、物流、信仰、土木技術、造船技術などなど・多岐にわたる歴史資料が濃密に残されており、港町塩津における古代から中世の都市空間構造は、海洋国の日本の歴史を知る上で欠くことのできない遺跡といえます。

今年度は地下道工事に伴い陸側の発掘調査を実施します。さらに重要な資料が多数検出され、出土することが予想されます。

主な出土遺物

(1) 交易関係品

「敦賀」墨書土器 (日本海側の重要港「敦賀」と記された土師器皿。) (12世紀)

(2) 文具

石製硯 (石製の硯としては国内最古級。産地不明。) (12世紀)

物差し (約3.5 cm刻み。大宝律令の大尺35.6 cmに近い。) (12世紀)

(3) 輸送船関係

船形木製品 (既発表品。琵琶湖の代表的な輸送船丸子船の祖形。) (12世紀)

船釘 (大型の釘。船板を縫い合わせるように打ち込む釘。) (12世紀)

ノミ (全鉄製のノミ。船釘を打ち込む前の先掘りをおこなう。) (12世紀)

(4) 造成用土木用具

鋤先(すきさき) (当時のシャベル。) (14世紀)

(5) 手工業用具

ヤットコ (鍛冶屋の道具) (12世紀)

ハサミ (和バサミ・握りバサミ) (12世紀)

紡錘車 (糸紡ぎの道具) (12世紀)
朱漆皿 (漆絵付け用のパレット) (12世紀)

(6) 台所用具

五徳 (鍋釜の火受け台。鉄製。) (12世紀)
鉄製鍋 (五徳と一緒に使用。) (12世紀)
火箸 (鉄製、捻りの装飾あり。) (12世紀)

(7) 装身具

筭 (こうがい) (整髪用具。骨角製のものと木製のものがある) (12世紀)
ガラス玉 (直径1.36cmの大きなガラス玉。おそらく簪の飾り玉) (14世紀)
腰刀 (刃渡り10 cm～25 cmの刀。当時の万能刀。当時の成人男性が身に付けたほか、調理や製材、伐採など万能に使われた刀。50本近く出土) (12～13世紀)

(8) 祭祀具ほか

銅拍子 (どびょうし・チャップパ) (当時の代表的な楽器のひとつ。鉄製。一対で出土) (12世紀)
鳥形代 (立体的な表現。目・足・羽を表現) (12世紀)
白磁犬・人形 (中国製磁器の人形) (12世紀)

(9) 皇朝十二銭 (水中に投げられた状態で出土) (9世紀)

「和同開珎」 和銅元年 (708) 初鑄
「万年通宝」 天平宝字四年 (760) 初鑄
「神功開宝」 天平神護元年 (765) 初鑄
「隆平永宝」 延暦十五年 (796) 初鑄



図1 塩津港遺跡 調査箇所

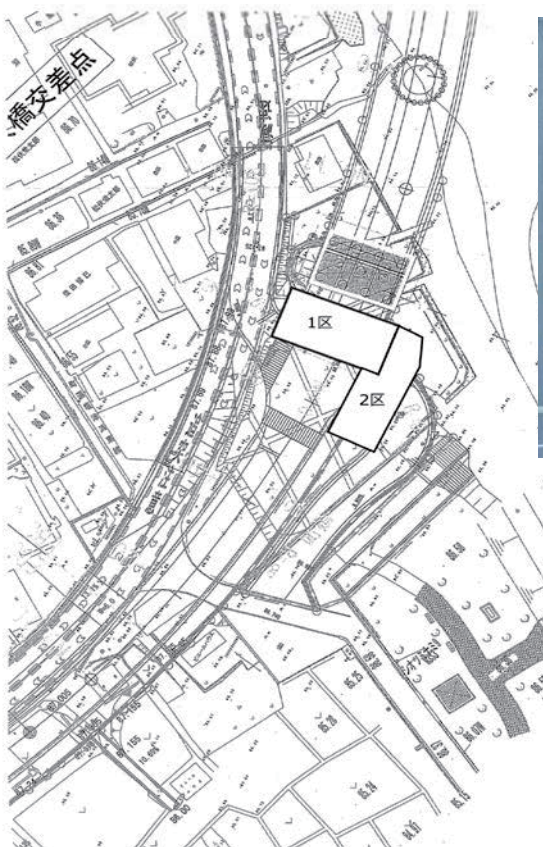


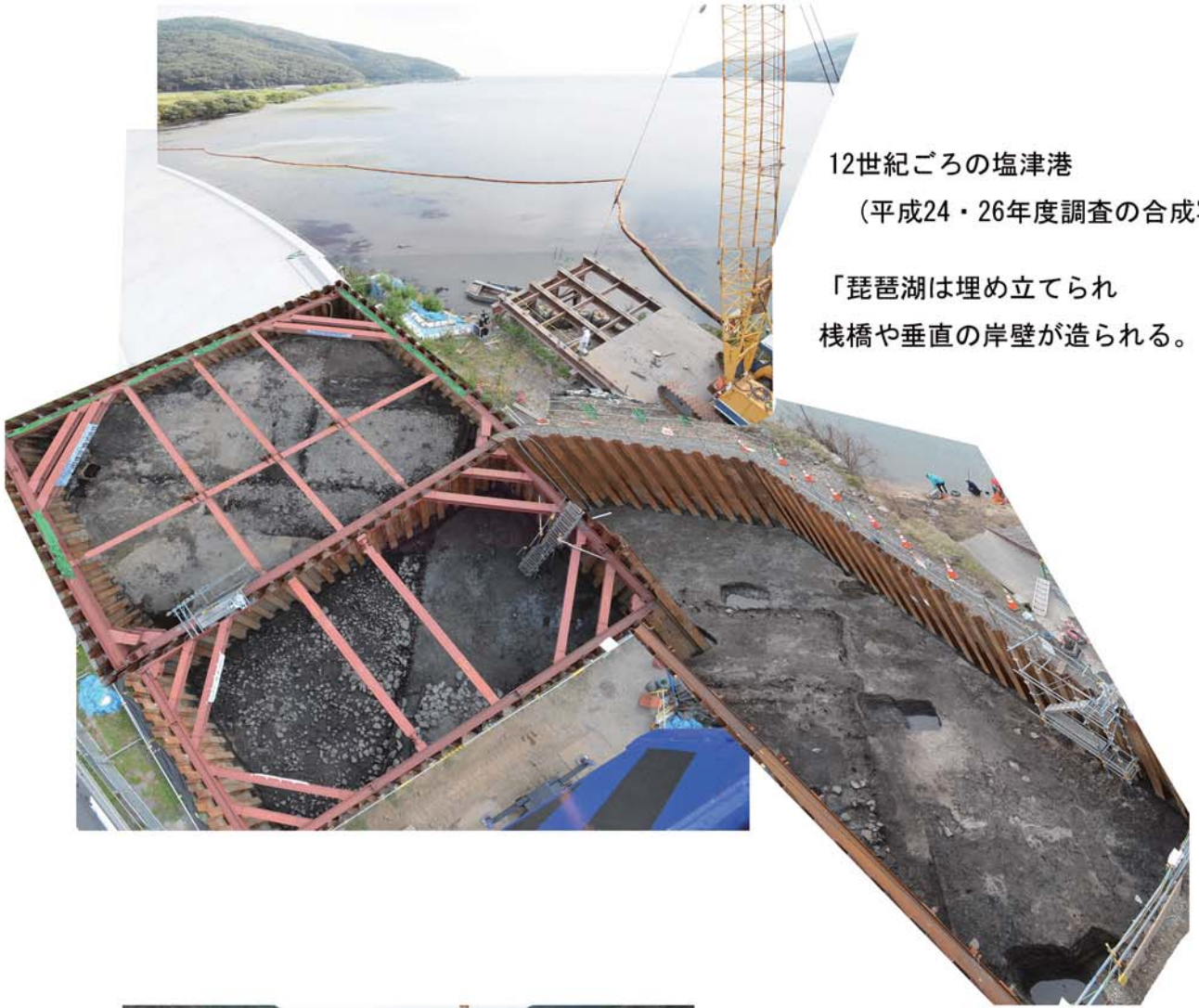
図2 調査区位置図



1区



2区



12世紀ごろの塩津港

(平成24・26年度調査の合成写真)

「琵琶湖は埋め立てられ
栈橋や垂直の岸壁が造られる。」



13世紀ごろの塩津港

(平成24・26年度調査の合成写真)

「全体が嵩上げされ
南北の道も作られる。」

現地表から約4m下で見つかった古代・中世の塩津港



船形木製品



石製硯



物差し



腰刀



線刻人物画土器

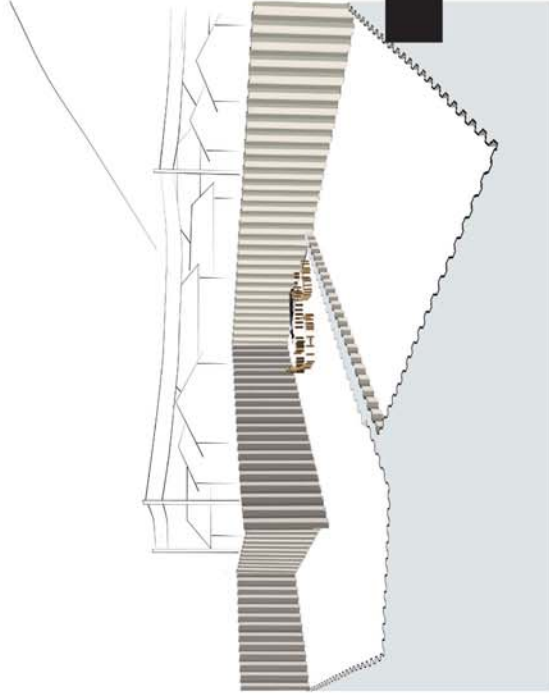


皇朝十二銭出土状況

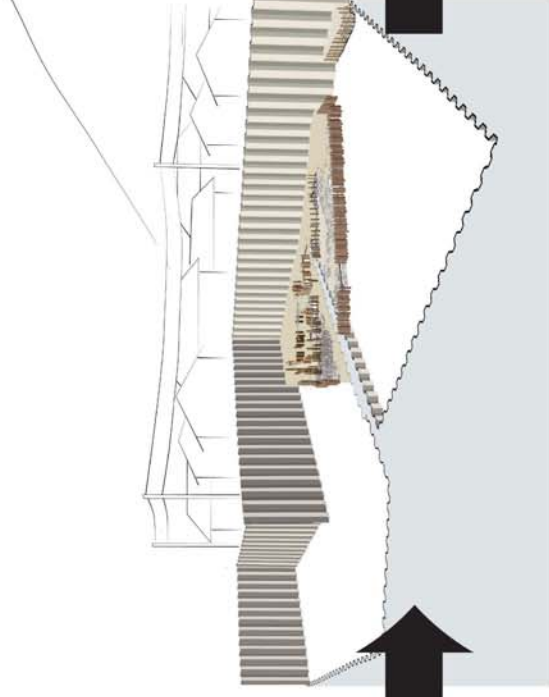


皇朝十二銭

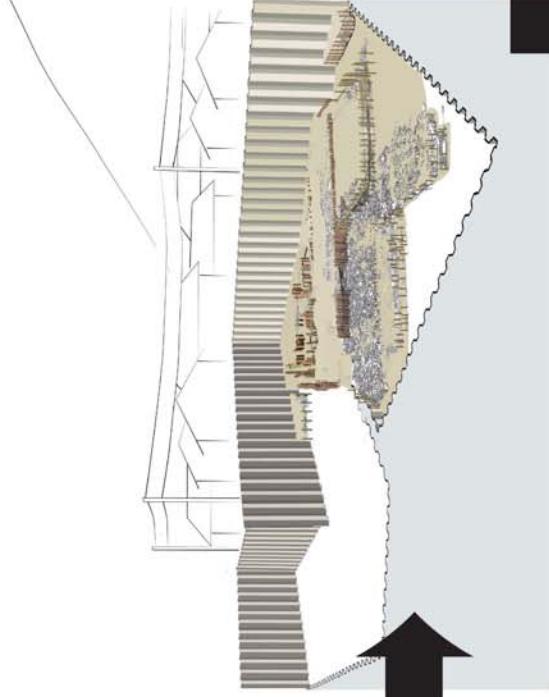
出土した主な遺物



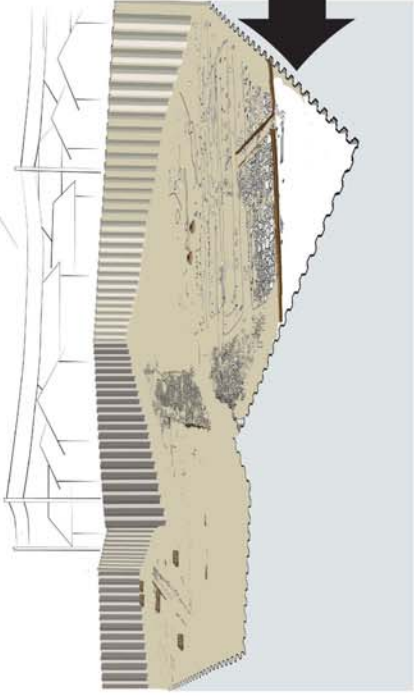
古代塩津港は、埋立て地で形作られている。現在分かっているところでは、最初の埋立て工事は約900年前に始まる。



陸側から埋立てられ、湖側へ延伸、人工的に陸化されて行く。

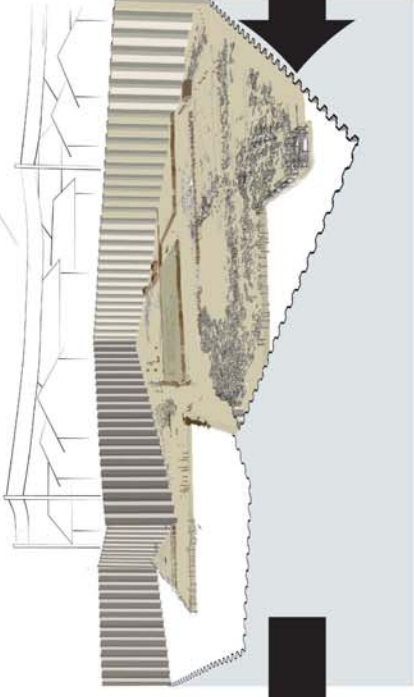


一度の埋立て範囲は小さいが、ほとんど時間を空けずに埋立てられていく。埋立て地には多量のゴミも捨てられていく。

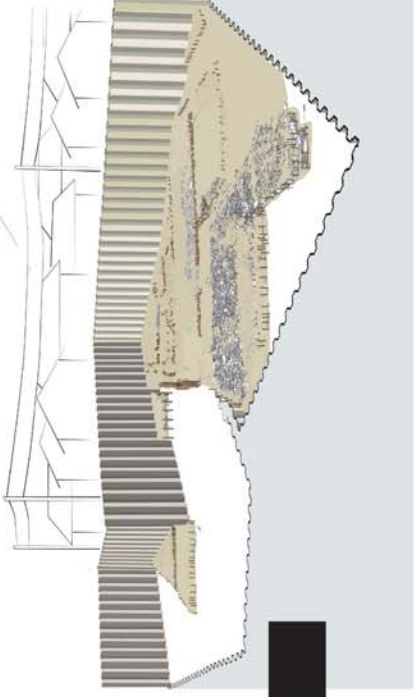


約800年前、さらに全体が60cm以上嵩上げされ、石敷きの道路が整備される。

何を契機に嵩上げや道路の整備が行われたかは不明だが、塩津港の大きな転換期であった。



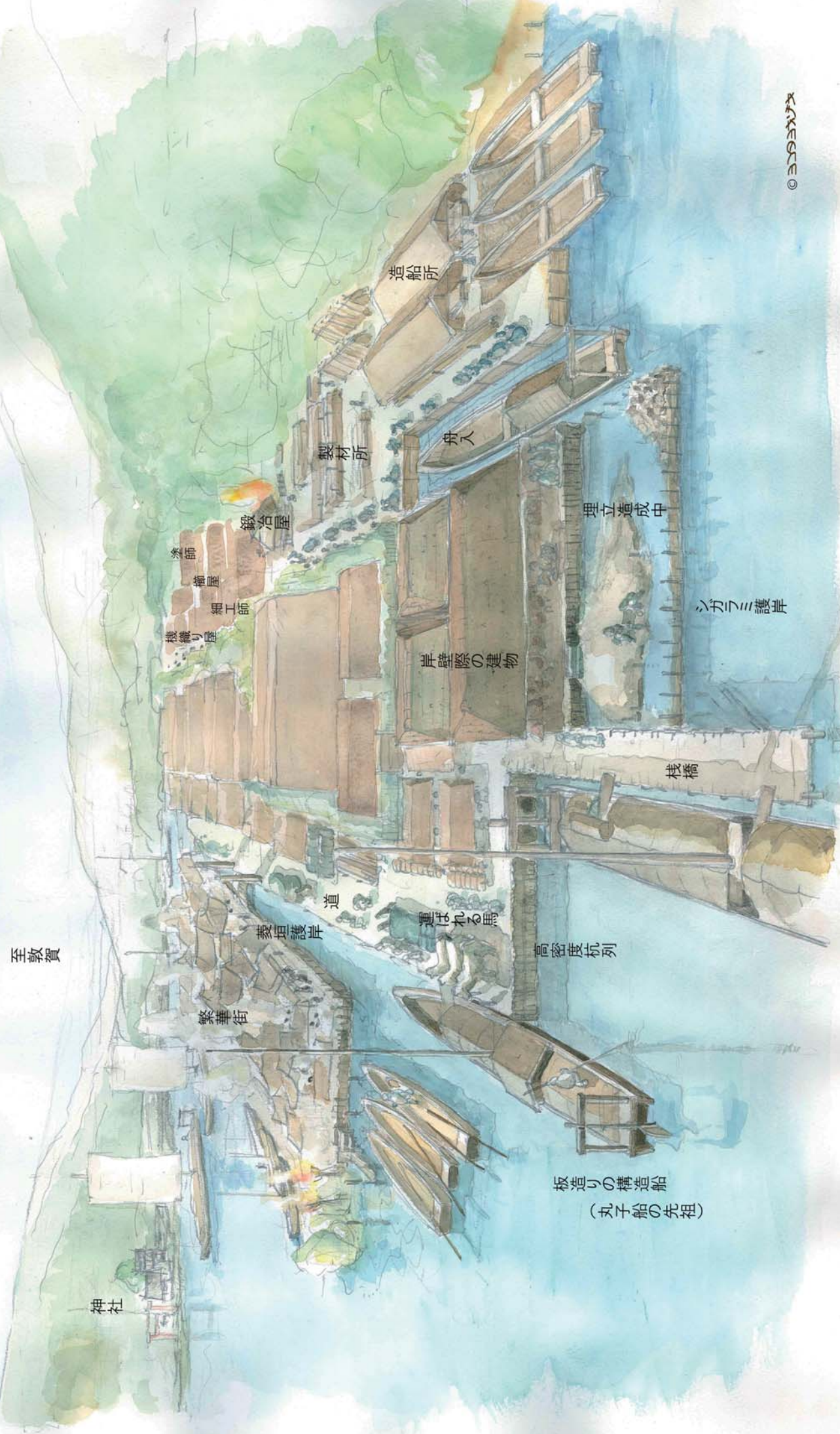
港の施設は約60年ほどの埋立て工事で、27m以上も湖側へ延伸・拡張した。



やがて調査地西側を流れる大坪川側にも埋立て工事が行われ、港が拡張されていく。

古代塩津港の港の変遷図

平安時代末期(12世紀)の塩津港の様子



至敦賀

神社

繁華街

菱垣護岸

道

運ばれる馬

板造りの構造船
(丸子船の先祖)

高密度杭列

棧橋

岸壁際の建物

機織り屋

細工師

櫛屋

漆師

鍛冶屋

製材所

舟入

造船所

埋立造成中

シガミ護岸